

A
DICTIONARY
OF
LITERARY
TERMS

MARTIN GRAY

英米文学用語辞典

A DICTIONARY OF LITERARY TERMS

MARTIN GRAY

丹羽 隆昭 訳

nci

NEW CURRENTS INTERNATIONAL CO., LTD.

英米文学用語辞典

定価——3,500 円(本体 3,398 円)

発行日——1990 年 1 月 10 日

著者——マーティン・グレイ

訳者——丹羽隆昭

発行者——近藤恆夫

発行所——株式会社ニューカレント インターナショナル

東京都文京区後楽2-22-12 〒112

TEL 03-816-5266(代) 振替東京 1-152361

印刷・製本—三美印刷株式会社

装幀——森本常美

ISBN4-89029-155-5

省略記号表

adj.	adjective 形容詞
AD	<i>Anno Domini</i> (ラテン語「主の年」) キリスト誕生以後・西暦
Ar.	Arabic アラビア語
b.	born 誕生す
BC	Before Christ キリスト誕生前・紀元前
c.	<i>circa</i> (ラテン語「およそ」)
d.	died 死す
e.g.	<i>exempli gratia</i> (ラテン語「たとえば」)
etc.	<i>et cetera</i> (ラテン語「その他」)
fl.	<i>floruit</i> (ラテン語「栄え」)
Fr.	French フランス語
Gael.	Gaelic ゲール語
Ger.	German ドイツ語
Gk.	Greek ギリシャ語
Heb.	Hebrew ヘブライ語
i.e.	<i>id est</i> (ラテン語「すなわち」)
It.	Italian イタリア語
Lat.	Latin ラテン語
Med. Lat.	Medieval Latin 中世ラテン語
Mid. E.	Middle English 中英語
N.B.	<i>Nota Bene</i> (ラテン語「よく注意せよ」)
n.	noun 名詞
Norw.	Norwegian ノルウェー語

O.E.	Old English 古英語
O.E.D.	Oxford English Dictionary オクスフォード英語辞典
O.Fr.	Old French 古(期)フランス語
O.H. Ger.	Old High German 古(期)高地ドイツ語
O.N.	Old Norse 古(期)スカンジナビア語
Pr.	Provençal プロヴァンス語
R.P.	Received Pronunciation 容認発音
S.F.	science fiction 空想科学小説
Sp.	Spanish スペイン語
v.	verb 動詞

序のことば

この辞書は、文学用語の意味を知ろう、あるいは確かめようと思われる方々に、その語の用法を、関連する歴史的な情報および具体例とともに、比較的簡潔かつ直截に説明するものである。^{クロスレファレンス}相互引照は小頭文字で示すが、^{スモールキャピタル}二通りに行っている。即ち、見出し語の説明文の末尾に置かれ、読者がその見出し語の内容と関連する別の見出し語を参照される手引きとなるよう行っているものがひとつ。そして、見出し語の説明文中に設けてあり、当該語が本書中、独立した見出し語として掲げてあることを示すだけのものが今ひとつである〔これは肉太和活字で示す(訳者・注)〕。ある見出し語の中で議論に用いられており、どこか他の個所から引照の対象とされている語は、読者の便宜を計って肉太英活字で印刷してある。外国語や本のタイトル、長い詩および劇などはイタリック体で示されている。

見出し語の主体を成す語が文法的にどのような品詞に当たるかに関して、その語が二つ以上の品詞として用いられたり、その意味に関して混乱が生じる恐れのある場合に限って言及されている。

読者の便宜を考え、巻末の付録に、本書で言及した全ての作家名を、生没年とともにアルファベット順に記載した。また英国歴代の君主リスト、およびその後には英文学史上の主たる時代区分表も掲載してある。本文中の作品に付された年次は初版を示すものであるが、演劇のみは例外で、初演を表わす。

文学研究者ならびに批評家たちが、専門用語を科学的かつ厳正に用いようと様々な努力を重ねているにもかかわらず、批評用語の多くは比喩的な表現を取る。たとえば、ある文体が ‘dense’ 「密度の高い」とか ‘pungent’

「刺すような」とか、あるいはまた ‘marmoreal’ 「大理石のような」とか形容される場合があるが、そのような場合は普通の辞書を引けば、これらの形容詞の明確な意味規定がなされていて読者の参考になるはずなので、文学の場ではこうした語はひんぱんに用いられているけれども、私はそうした「(文学)用語」の掲載をあえて避けることにした。

私は、文学用語が本来どう用いられるべきかということよりむしろ、それらが現にどう用いられているかを説明しようとしたつもりである。たったひとつ、‘involute’ という語を除けば、たとえもっと普及してもよいと思えるものであっても、あまり馴染のない語は収録しなかった。総じて、本書で定義を試みた語は、伝統的な批評用語のボキャブラリーから抜粋したものである。文学理論研究の急速な進展は並の読者には殆どついてゆけないほどの割合で次々に新造語を生み出している。しかし、こうした新造語についてはその道の専門家の著作に委ねるのが最善であろう。

殆どの語に関し、その由来が若干説明してあるが、その理由は、語がどう意味を変えてゆくか、変えられてゆくか、また語の歴史の中に現在使われている意味を理解する手助けになるような直截な意味がどう隠されているかなどを読者に思い起こして頂くのに有益と思われたからである。語の歴史についてもっと完全な情報を望まれる読者は、大部なものだが、*The Oxford English Dictionary* とか C. T. ^{オニオンズ} Onions の手による *The Oxford Dictionary of English Etymology* (1966) を参照されたい。現存する辞書類を調べたうえでそれらに対して然るべき敬意を払わないような辞書作成者がいれば、その人は愚かと言うべきであろう。この私の辞書でも大半の基本的文学用語の定義に対する要求には答えられるものと思考する。しかし、“magody” とか “narodne pesme” のような難解でめったにお目にかからない語の意味を知りたいと思われる読者には、J. A. ^{カドソン} Cuddon による *A*

Dictionary of Literary Terms (1977) をお勧めしておく。これはスパイ小説や探偵小説など純文学をやや外れた分野に関しても十分な量の、興味あふれる歴史的な記述が掲載されているものである。また私のこの辞書がカバーする領域をしのぐ別の著作として、M. H. Abrams^{エイブラムズ}による *A Glossary of Literary Terms* [第4版] (1981) がある。これには ‘speech-act theory’ 「談話理論」や ‘narratology’ 「発話学」それに ‘reader-response criticism’ 「読者反応批評」など、多くの批評理論の分野および論争についての秀れた、偏りのない説明が記載されている。いかなる一冊の辞書といえども全ての読者の要求を満たすことはあるまい。料理の本と同じことで、愛好者は恐らく二冊以上の参考書を持つ必要に迫られることであろう。

目 次

省略記号表	i
序のことば	iii
辞 書	1
付 録 1：本書で言及されている作家および歴史上の 人物の生没年表	354
付 録 2：ノルマン征服以後の英国君主一覧表	376
付 録 3：英文学の主要年代区分	378
訳者あとがき	379

A

Abridgement. [əbrɪdʒmənt] (O. Fr. 'shorten' 「短くする」)

ある作品を短縮したり、時として簡略化もしくは削除訂正した(BOWDLERIZED)りした版、要約本や抄本のこと。古典作品の要約本はしばしば子供向けの読み物となっている。

Abstract. (Lat. 'drawn out' 「抽出された」)

(n.) 一著述の論旨の概要。

(adj.) 物よりも観念に関わる、抽象的(な) (この意味では、abstract はしばしば具体的(な) [CONCRETE] と対立する)。批評では 'abstract' や 'concrete' という語は文学の主題もしくは言葉づかいの特徴を記述するため、いささか散漫に用いられることがある。かくして、^{ナッシュ}Nashe の 'Song' 『歌』(1600) の冒頭部分は死の扱い方が抽象的だということになる。

Adieu, farewell earths blisse,

This world uncertain is,

Fond are lifes lustfull joyes,

Death proves them all but toys.

さらば、地上の喜びよさようなら、

この世は不確実なもの、

人生の欲望に満ちた浮かれ騒ぎなどたわいもない、

死はそれらすべてが遊戯でしかないことを証明する。

これらの語は時折ひとつの比喩的表現の中での異種の語を際立たせるのに用いられることがある。^{キーツ}Keats の *Hyperion* 『ハイピリオン』(1820) の冒頭の詩行、'Deep in the shady sadness of a vale 「谷間の暗い悲しみの中に深く」' においては、抽象語 *sadness* がこれに比べて具体的なものである谷間の影と結びつけられている。このように抽象的なもの

を特殊化して言う方法は詩でよく行われる。これは擬人化〔PERSONIFICATION〕に本来備わった効果である。

過度の抽象化を避けることは一部の 20 世紀の詩人たちのほとんど詩作綱領^{こうりょう}と言ってよいものになった。Pound は 'A Retrospect'『回顧』(1918)と題した論文の中で次のように書いている。

'dim lands of peace'「平和のほの暗い土地」というような表現は使ってはならない。イメージを鈍らせるからだ。こうした表現は抽象語を具象語とごちゃまぜにする。これは、自然の物がつねに適切な象徴であることを、書く者が認識していないことに由来する。

軽べつ語として、'abstract' なる語はあまりにも理論的にすぎる議論、本来必要とされる明確な証拠との緊密なつながりからあまりにもかけ離れた議論を指すのに用いられることがある。

Absurd, Theatre of the Absurd.

不条理な、不条理演劇。実存主義〔EXISTENTIALISM〕の哲学は人間を時間的にも空間的にも無目的で不可解な宇宙の中で孤立した存在として描く傾向にある。根源的動機も指導原理も、はたまた真理とか意味についての本来的感覚も持ち合わせないため、人間の存在は苦悩に満ちた不安〔ANGUST〕と不条理とによって特徴づけられる。人間の不条理に関する注目すべき記述の一例は、フランスの哲学者で小説家の ^{アルベール} Albert ^{カミュ} Camus の *The Myth of Sisyphus*『シシフォスの神話』(1942)と題された論文集に収められている。

20 世紀は多くの作家たちが人間の不条理な状況を描いてきた時代である。表現主義〔EXPRESSIONISM〕や超現実主義〔SURREALISM〕というヨーロッパでの文学運動はこうした見方を練り上げるために誠にふさわしい技巧を提供した。散文の分野では、ドイツの小説家 ^{フランツ カファ} Franz Kafka の *The Trial*『審判』(1925)や *Metamorphosis*『変身』(1912)のような作品が、奇怪で不可解な状況に耐えなければならない存在としての主人公を呈示している。演劇の分野では、超現実主義と笑劇〔FARCE〕とが合体して新しい種類の芝居を形成している。「不条理演劇」という呼称は、1961 年に出版された ^{マーティン エスリン} Martin Esslin の同名の書物によってお馴染みとなった。

「不条理な」芝居は 1950 年代に隆盛を見た。Ionesco, Beckett, それに Pinter らが、

作品にそうしたレッテルを貼られた注目すべき劇作家である。たとえば Ionesco の ^{ライノセロス}*Rhinoceros*『サイ』(1960) は、人間がどんどんサイへと変身してゆく過程で、人間相互の疎外と無意味で不毛な存在を強調してゆく一種の寓話である。ANTI-HERO, AVANT-GARDE, BLACK COMEDY, TRAGEDY の項目も参照のこと。

Accent. (Lat. 'like song' 「歌のように」)

アクセント。強勢 (STRESS) と同義。音節に置かれた強勢のこと。「アクセント」は詩の記述に際してどこに強勢が置かれるのかを示すためにしばしば用いられる。

Acrostic. [əkrɔstɪk] (Gk. 'end of verse-lines' 「詩行の先端」)

遊戯詩。各行の最初の文字 (もしくは、もっとまれにはあるが、中間あるいは最後の文字) が、まとめて読んだ場合にひとつの語、あるいは ABC 等のようなひとつの言語模様を作り上げるような詩。

Act.

(n.) 幕。芝居の筋 (ACTION) の区分のひとつで、しばしばさらに場 (SCENE) に分れる。往々にしてこれらの区分は芝居の展開における時間の変化と符号する。舞台では筋の区分は俳優の出入り、場景の変化、照明効果等によって、あるいはまた額縁 (PROSCENIUM) 状の枠のある劇場の場合であればカーテンで舞台を閉じることによって明確化できる。

エリザベス朝の劇作家たちは ^{セネカ}Seneca をはじめとするローマの劇作家たちから五幕形式を模倣したが、これは ^{イブセン}Ibsen や ^{チエーコフ}Chekhov が 19 世紀末に四幕劇を実験してみるまであらゆる芝居の標準形式となった。現代の劇作家たちは演劇構成法に関しては大いに自由である。三幕劇がおそらく今最も普及していると言えよう。

Action. (Lat. 'doing' 「行うこと」)

筋、事件。あらゆる物語における出来事展開の主たる流れ。芝居に関して用いられることが最も多い。筋はしばしばプロット (PLOT) と同義である。しかし、この筋という語は、物語が次第に展開してゆくさまを、回想的に理解される物語全体の構造と区分するために用いられ得る。

Adage. [ædɪdʒ] (Lat. 'saying' 「言うこと」)

格言、ことわざ、金言。

Addisonian.

アディソン的。定期刊行物 *The Tatler*『タトラー』および *The Spectator*『スペクテイ

ター」にしばしば寄稿した随筆家 Joseph Addison の文体上の特色。明解で、肩がこらず、上品で、都会風で、均整が取れ、そして恐らくは多少退屈な文体。AUGUSTAN AGE, NEOCLASSICISM, PERIODICAL の項目も参照のこと。

Aesthetic distance. DISTANCE 参照。

Aestheticism [esθétəsizəm] or **The Aesthetic Movement.**

唯美主義。19 世紀後半に盛んであった文学をも含む全ヨーロッパ的芸術運動で、芸術の至高の価値と自己充足を強調した。唯美主義、耽美主義のこと。唯美主義的視点の例は早くから多くあって De Quincey の論文 'On Murder Considered as One of the Fine Arts'『美術のひとつと考えられる殺人に関して』(1827) とか、Keats の 'Ode on a Grecian Urn'『ギリシャの古壺に寄する頌詩』(1820) の次のような謎めいた終結部などがその例である。

'Beauty is truth—truth beauty'—that is all

Ye know on earth, and all ye need to know.

「美は真なり、真は美なり」それのみが

汝が地上で知っており、また知らねばならぬことなのだ。

自意識的運動としての唯美主義の主たる解説者たちは、Gautier, Baudelaire, Flaubert, Mallarmé, Huysmans からフランス人であった。アメリカでは Poe が 'the poem for the poem's sake' 「詩のための詩」という理論を提出し〔'The Poetic Principle'『詩の原理』(1850)〕、イギリスでは Pater, Wilde, Dowson, Lionel Johnson それに Symonds らが唯美主義的手法の多くを採用した。Tennyson, Morris, それに Swinburne とも影響を受けている。'Art for Art's Sake' 「芸術のための芸術」というのが唯美主義の標語である。芸術は人間による達成の最高のものであって、それゆえいかなる道徳的、政治的、教訓主義的もしくは実用的目的にも従属してはならない。芸術の目的はただそれ自身の美のためにのみ存在することなのである。芸術はただ美的規準によってのみ価値判断され得る。

唯美主義は、19 世紀の功利主義や俗物的 (PHILISTINE) 物質主義への反動として説明することも可能である。

唯美主義は、後の段階で、より極端な教義のいくつか——特に、人生が芸術と対立す

るという概念——が誇張され、**デカダンス**〔DECADENCE〕と呼ばれる運動を生んだ。

Aesthetics. [esθétiks] (Gk. ‘things perceptible to the senses’ 「五感に感知されるもの」)

美学。美の性質の哲学的研究に与えられた名称。美なるものの鑑賞、定義、批評、それに嗜好の理論と関わるものである。一部の哲学者、特にドイツの哲学者 ^{イマヌエル カント} Immanuel Kant は ‘aesthetic’ 「美的な」という語をもっと広義に用い、「五感を通しての知覚の哲学と関連する」という意味を持たせた。この語の現在の用法は、ドイツの哲学者 A. G. ^{バウムガルテン} Baumgarten の嗜好の理論を検証した *Aesthetica* 『美学』(1750) に端を発する。

aesthetic (adj.) 「美的な」という語は、時として口語的に、さりげなく、美しいとか趣味のよいとかの意味で用いられる。また美学の研究に言及することも、**唯美主義**〔AESTHETICISM〕と呼ばれる文化現象の種々の概念に適用されることもある。

Affectation. (Lat. ‘aspiration’ 「大望」)

論じられる主題には不適切な、偽りまたは見せかけの文語体の使用。

Affective Fallacy. [əfektiv fæləsi]

作品の心理効果を価値と把える誤謬。現代アメリカの批評家 W. K. ^{ウイムザット} Wimsatt と M. C. ^{ビーズリー} Beardsley による論文の標題で、Wimsatt の *The Verbal Icon* 「ことばのアイコン」(1954) に掲載されている。彼らは、詩を評価するに当たってその詩の読者への影響とか情緒的衝撃をもってするのは誤まった批評法で、**印象批評**〔IMPRESSIONISTIC CRITICISM〕という結果に終るだけだと論じている。CRITICISM, INTENTIONAL FALLACY, NEW CRITICISM の項目も参照のこと。

Age of Reason.

理性の時代。**王政復古期**〔RESTORATION〕および**文芸全盛時代**〔AUGUSTAN AGE〕——2つ併せると1660年から1745年までに及ぶ——ならびに理性なる理想が諸芸術における知的活動を支配した18世紀全体をも大まかに指す用語。この時代の文学は均整の取れた判断、過剰の欠落、端正な節度と抑制によって特徴づけられている。NEOCLASSICISM 参照。

Alazon. EIRON 参照。

Alexandrine. [ælizændrin]

アレクサンドル格。 *vers héroïque* 「英雄詩形」という16世紀以来フランスの作詩法にお

いて最も行きわたった韻律〔METRE〕で一行十二音節。この名の由来は、12世紀末の古期フランス語によるアレキサンダー大王にまつわる物語で *Roman d'Alexandre*『アレキサンダー大王物語』という、その中でこの韻律が用いられている作品に基づく。これに最も近似した英語の詩形は弱強六歩格——^{アイアムビック ヘキサミーター}iambic hexameter——（METRE 参照）である。Spenser は *The Faerie Queene*『妖精の女王』（1590, 1596）で採用した彼独自のスペンサー連〔SPENSERIAN STANZA〕の最終行でこの韻律を用いているが、一般には普及した韻律ではない。Pope はこの六歩格の厄介な効果を *An Essay on Criticism*『批評論』（1711）の中で次のように実例を挙げて説明している。

A needless Alexandrine ends the song,

That like/a woun/ded snake/drags its/slow length/along.

不要な英雄詩形による歌の終り方は、

傷ついた蛇のように、その身をゆっくりズルズルと引きずるもの。

Alienation effect.（ドイツ語の *Verfremdungseffect*「疎外効果」に相当）

ドイツの劇作家で演劇理論家 Brecht ^{ブレヒト}が注意したことには、役者が自分の役柄に共鳴している劇公演において、観客は作り出された現実の幻影に圧倒されてしまい、自分たちが抱いた登場人物への共感が、その劇の主題に対して批評的判断を下そうという方向へ向かうよりは、むしろあいまいな情緒的満足感やら興奮やら混乱にしか至らないような動き方をするのを黙認する傾向がある。そこで彼は、役者たるものは観衆に自分たちが見ているものはあくまで芝居なのだ、現実の一表現にすぎぬものだとすることを思い起こさせるように、役柄とは一定の距離を置くべきだと主張した。こうした分離と自覚を観衆に達成させる手助けとして Brecht の芝居には歌やら筋の概略やらがそこそこに登場して来るうえ、英雄的登場人物たちでさえ情が薄いという欠点によって損われる傾向にあり、観衆もなかなかそうした人物に共感しにくいラミがある。CATHARSIS の項目も参照のこと。

Allegory. [æləgɔ:ri] (Gk. 'speaking otherwise'「別の様式で話すこと」)

^{うろ}寓。これはきちんと定義しにくい、その理由はこの語が文学作品そのものの内在的側面を指すのと同じくらいに、その作品の解釈法をも指すからである。寓の最も単純な形態は、二通りの筋の通った意味を持つように書いてある物語もしくは状況から成り

立っている。たとえば、Dryden の ^{ドライデン} *Absalom and Achitophel* 『アブサロムとアキトフェル』(1681)では、聖書でお馴染の人物たちが作家と同時代の歴史上の人物たちを表わしていて、ダビデ王はチャールズ二世、アブサロムはチャールズの私生児モンマス公、アキトフェルはシャフツベリー卿などとなる。聖書の物語は政治に対する隠れた諷刺的解説を行うために用いられている。この詩はそれ自体ちゃんとした物語として存在するのだが、隠れた意味体系が分る者には、明確で特定の政治的意味を有するのである。こうした、一貫性を持つ隠れた第二の意味体系が寓喩の特徴である。

しかしながら、寓喩はいくつもの意味体系、解釈体系を提示することもある。^{スペンサー} Spenser の *The Faerie Queene* 『妖精の女王』(1590, 1596)では、妖精の女王その人がイングランドのエリザベス一世であると同時に Glory「栄光」というひとつの理想を表すものでもある。*The Faerie Queene* は解釈の糸を一本に絞るにはあまりに多様な物語である。

種類は異なるがもうひとつの有名な寓喩は ^{バニヤン} Bunyan の *The Pilgrim's Progress* 『天路歷程』(1678)で、この作品では主人公 ^{クリスチャン} Christian の the City of Destruction「破滅の都市」からの旅がキリスト教の救済を例示している。次の短い一節は Bunyan の寓喩的手法を端的に表わすものである。

Now a little before it was day, good Christian, as one half amazed, brake out in this passionate speech, What a fool, quoth he, as I, thus to lie in a stinking Dungeon, when I may as well walk at liberty? I have a Key in my bosom, called Promise, that will, (I am perswaded) open any Lock in Doubting-Castle. Then said Hopeful, That's good news; good Brother pluck it out of thy bosom, and try: Then Christian pulled it out of his bosom, and began to try at the Dungeon door, whose bolt (as he turned the Key) gave back, and the door flew open with ease, and Christian and Hopeful both came out.

さて昼少し前に善良な「クリスチャン」は半ばぼう然とした者のように次のような熱烈な言葉を吐いた。何とまあ、と彼は言った、この私は馬鹿だろう、自由に歩き回っていてよい時に、こうして異臭を放つ土牢に横たわっているとは。私は「約束」という名の「鍵」を胸中に持っており、それは(私の信じる

ところでは)「疑いの城」のどんな「錠前」でもあけることができるのだ。すると「ハウプフル」は言った、それは良い知らせです。「善良なる兄弟よ」、それを胸中から引っぱり出してやってごらんなさい。そこで「クリスチャン」はそれを胸中から引っぱり出し、土牢の扉に試してみると、そのかんぬきは(鍵を回すにつれて)後退し、扉は簡単にパッと開き、「クリスチャン」と「ハウプフル」とは両名とも外へ出た。

疑いもなく、Bunyan の物語の精神的意味は ‘Hopeful’ や ‘Christian’ というような擬人法 (PERSONIFICATION) の使用、ならびに ‘Slough of Despond’ 「絶望の沼」や ‘Vanity Fair’ 「虚栄の市」というような場所への旅につけられた道徳的命名法によって終始一貫この上もなく明瞭である。

寓喩という用語が現在最もよく用いられるのは *The Faerie Queene* や *The Pilgrim's Progress* のようなかなりの長さを持った作品についてである。これより短い寓喩形態はフエィブル (FABLE) とかパラブル (PARABLE) と呼ばれることがある。寓喩的人物像は絵画や彫刻でお馴染である。

寓喩的解釈は、批評用語としての寓喩の狭義の定義から想像されるよりももっと影響力もあり普及もしている思考形態において文学を理解する一手段である。文学のあらゆる解釈、つまり文学作品をその字面通りの、表面的な意味以外にいくつも意味を持つものとして理解するいかなる方法も寓喩的と呼ぶことができよう。

特殊な種類の寓喩的解釈が古典期の終りからルネサンス期の終りに至るまで文学の読みを支配したことがある。キリスト教的思想家たちは古典文学の中に寓喩的な意味を求めた。ローマやギリシャの文学ならびに異教の神々の神話も、その中に寓喩的な形でキリスト教の真実が含まれていることが示されれば受入れられるようになった。たとえば オルフェウス エウリュディケー Orpheus や Eurydice はキリスト教の贖罪および救済を寓喩的に扱ったものとして理解し得る、というわけである。 プルデンシウス Prudentius の *Psychomachia* 『サイコマキア』 (c. AD 405) は悪徳と美德とが魂の支配をめぐって争う様を描いており、非常に影響力が大きかった。

‘typological allegory’ 「予型論的寓喩」は旧約聖書を、新約聖書に出て来る出来事の予表物で満ちたものとして説明すること。新約聖書はすでにこの解釈法の例をいくつも包含している。例えば、ヨナと鯨の物語はマタイ伝 12: 40-2 のキリストの地獄への下降